

左ページより続く

そして 如来の御恩とい
うのがふかく、ふかくわかつ
てくるのである。
それが信知である。次に
信力とは本當に教えを受け
とめる、信受といいま
す。教えをわが身に受け
とめる力が増してくる。
教行信証を完成され、
その後の十数年間、なく
なられるまでの間に、
この教えを基礎として聖
人はそれを深く自ら頂戴
し、信力増上して、より
広くより深く信知し、信
受し領解された。聖人は
教行信証の教えの通りに
生きぬかれた。これを信
順といひます。これは信
力増上は南無阿弥陀仏の
働き、如来の働きです。
如来の働きによって人は
いよいよ念仏申すように
なるのです。念仏申すと
いうことが東西の本願寺、
共に非常に衰えておりま
すね。残念なことです。
御晩年には第一が念仏を
非常に強く勧められてい
ると言うこと。第二にか
わられた点は知恩報徳を
強く言われていたること
です。もちろん教行信証に
も如来の御恩の深きこと
を知んぬ、聞くところを

慶び獲る所を歎ずるなり、
と如来の本願を聞き開い
てよろこび、感謝がくり
かえされていく。しかし、
聖人の御晩年は御恩の深
いことがわかったという
ような程度のものではな
い。身を粉にしても報ず
べし、骨を砕きても謝す
べし。というようにいわ
れている。この恩徳
讃は聖人86歳の作であ
ります。如来の教えを十
方に広めて如来の御恩に
報いたい。そういう御心
が強くでてくるのは御晩
年ですね。第二の特徴は、
宿業という問題があげら
れている。84歳で我
が子善鸞を義絶し親子の
縁を断られたことです。
これによって聖人はたの
みとしておられた後継者
を失い、経済的にも困つ
た中で御晩年を終えられ
た。そういう中で、我が
身の業ということ痛切
にいただかれた。底切れ
ない業をもつた我が身に、
底知れない働きを加えて
くださった、助けんとお
ぼし召し立ちける本願の
かたじけなさよ。と感銘
された。三つの御晩年の
特徴をあげましたが、こ
れらをまとめると、いよ
いよ念

仏申し、宿業を知って、
いよいよ念仏を申す。従つ
て「ねてもさめてもへだ
てなく称名念仏となうべ
し」と言うことになつて
くる。ここが一番大事
な帰結であろう。(中略)
続いて、「弥陀大悲の
誓願を深く信じる」とい
うことについて申したい。
弥陀の誓願とは四十八願。
四十八願は第十八願が中
心でこれを王本願ともい
う、しかし、聖人の教を
いただくと十八願の前に
大切な本願があげてある。
「超世無上に撰取し 選
択五劫思惟して 光明寿
命の誓願を、大悲の本と
したまえり。」如来大悲
の本願の根本は、光明無
量、寿命無量の誓願が根
本である、と申されてい
る。もう一つ「如来の作
願をたずぬれば、苦惱の
有情を捨てずして、廻向
を首としたまいて 大悲
心をば成就せり」どち
らも正像末和讃にある。大
悲の成就は廻向がとどく
ところにある。大悲の根
本は光明無量、寿命無量
である。インドの梵語で
寿命無量をアミタユース
といひ、光明無量をアミ
ターバといひ、一緒にす
るとアミダ、南無阿弥陀

仏という。大悲の根本は
南無阿弥陀仏となろうと
いう本願、南無阿弥陀仏
となろうと言うところに
大悲の根本がある。そし
てその南無阿弥陀仏を廻
向して衆生に届ける。
それを一番大事なのち
として信じている。衆生
に南無阿弥陀仏が届く所
に如来大悲が成就する。
これを廻向を首といたま
えり、南無阿弥陀仏の廻
向という。大変むつかし
いが、誓願、本願を信ず
るとは、どういう事かと
いうと、信じるとは、疑
わずに信じこむことでは
ない。疑わないようにし
ようというのでもない。
これらは人間の計らいで、
これを自力の計らいとい
う。本願を信ずるとい
うのは自力の計らいでは
ない。如来の廻向が届いて
私たちが上に光明無量、
寿命無量の如来の働きが
いたり届くとき私の心に
生まれ出るものが信心。光
明無量というの私を照
らす、本願の教えを聞いて
ゆく、私を照らしぬく、
それを如来の光明の照破
という。それが阿弥陀の
働きであります。その働

うと一からきている。
非化(変化)なもの、絶
対)の世界の働きが、南
無阿弥陀仏という如化の
中に保たれている。そし
て寿命無量、長いのち
です。慈悲をいう。御
のちの中におさめとられ
て私が如来の命をいただ
くのである。それを寿命
無量という。従つて南無
阿弥陀仏は大変な働きを
持っている。光きわもな
く私を照らしぬこうとい
う働きを持ち、私を如来
の命の中におさめとろう
とする働きを持つ。これ
が南無阿弥陀仏であり、
これが本願の中心なので
す。その働きが届く、こ
れを廻向成就という。
これが届いた所を信心と
いう。この南無阿弥陀仏
の本願をききひらいてこ
の廻向を受けたところを
誓願を信ずるといふ。
そこを第十八願という。
第十八願と言う所に如来
本願がとどいた姿がある
(中略)。
その届ける方法は我が名
号、南無阿弥陀仏を聞い
て、聞き開いたものに届
けようという本願である。

裏面に続く

細川 巖 講述
正像末和讃講演

「弥陀大悲の誓願を
ふかく信ぜん
ねてもさめても
南無阿弥陀仏を
となふべし」
平成六年八月二十二日
第7回歎異抄に聞く会
記念講演

はじめに

この度、恩師 細川 巖
先生が国東広域病院に來
られる機会があり、その
折に、無理にお願いをし
て私たち「歎異抄に聞く
会(国東)」の為、先生
の御講話をいただくこと
ができた。私達の会の歩
みの記念であり、また有
縁の方々にも是非とも読
んでいただき、求道の一
助になればとの願いを持
つて、先生のお許しを得
て、平成六年十一月
歎異抄に聞く会 世話人
田畑 正久
(宇佐市、第2佐藤病院
院長、龍谷大学大学
院教授) 細川先生は

この御講話の一年四ヶ月
後、この国東広域病院
(院長田畑先生)にて
76歳でお亡くなりにな
りました。
今回は
「弥陀大悲の誓願を
深く信ぜん人はみな
なく 南無阿弥陀仏を称
ふべし」この和讃につい
て感ずるところを申しあ
げたい。七五調四句の和
讃、私はこの和讃を初め
て読んだ時には、これは
法然上人がつくられた和
讃とばかり思っていました。
陀仏、往生の業には念仏
を本となす、といて、
称名念仏を中心に、教化
されその主著も選択本願
念仏集と申す念仏中心の
お方であります。
それで「ねてもさめても
へだてなく 南無阿弥陀
仏を称ふべし」こういう
歌は法然上人がおつくり
になつたとばかり思つて
おりました。何ぞはか
らん、親鸞聖人の和讃で
した。聖人の正像末和讃
の中にあり御晩年の作で
して、85歳から86歳、
聖人が90歳でなくなら
れる数年前につくられた

和讃であります。 聖人
の教えは信心正因といわ
れ、信心が中心になつて
いまして、弥陀の本願信
じて、他力信心を頂き、
仏恩報謝の念仏を申しな
がら往生浄土していく、
このように私は理解して
いました。それでこの
「ねてもさめてもへだて
なく念仏申せ」と聖人が
念仏をおすすすめになつて
いる和讃は、私にとつて
大きな驚きでした。現在
の浄土真宗がもし親鸞聖
人の教え通りになつてい
ないところがあるとする
ば、それはまずこの一点
ではないかと思ひます。
今、本山でも末寺でも上
から下までみな、念仏申
していかないのが現状です。
念仏申す人が非常に少な
い。そこが一番親鸞聖人
の教えに背いている所だ
と思ひます。
ところで、この和讃をよ
くみると、弥陀大悲の誓
願を深く信ずる人、信ぜ
ん人といふのは、信じて
いる人のことですね、本
願を信じる人について、
いわれている教であつて、
そういう人に対して、ね
てもさめてもへだてなく
南無阿弥陀仏を称えなく
いよと、おすすすめになつ

ているが、いわゆる、自
力疑惑の段階というか、
実際にまだ本願を信じな
い、初歩の段階にいる
者が大多数である。その
人たちはそれ程、念仏申
す必要はないのじゃない
か。こういうふうにも一
応思われる。しかし、そ
れは、同じ正像末和讃に
愚禿述懐(文明本では疑
惑和讃)という和讃があ
ります。それをみると次
のように言われている。
「信心の人におとらじと
自力疑惑の行者も 如
來大悲の恩を知り 称名
念仏はげむべし」これも、
とても親鸞聖人の和讃と
は思われぬ程のもので
す。しかし、なんぞはか
らん親鸞聖人の教えです。
信心の人におとらじと、
信心の人が称名念仏はげ
む。それに負けないよう
に信心のない、自力疑惑
の人達も、どうか如来大
悲の恩を考へて、称名念
仏はげむべし。と申され
ている。これは、本願が
わかつてから称名念仏を
はげむのではない。自力
の行者もそれぞれの段階
で如来大悲の恩徳を考へ
て称名念仏はげむべしと
申されている。したがつ
て信心の人も、信心でな

い人も、ねてもさめても
へだてなく称名念仏はげ
むべし、これが、親鸞聖
人の最後の教えなのです。
これは非常に大事なこと
で、今、我々浄土真宗の
おそだてをこうむつてい
るものは、深く反省しな
ければならない教えと私
は痛感いたしております。
(中略)。御晩年に親鸞
聖人は非常に変わられま
した。そのことが大事で
あります。(中略)
これほどまでに念仏申せ
は出てこない。70才代
で教行信証をつくられ、
その後もう十何年、生き
られた。その晩年のお考
えは、全く教行信証と同
じで、なに一つも変わら
なかつたかという、
そうではない。信心とは
そういうものではない。
信心は、信力増上といっ
て段々と働きがまして深
まるものである。(中略)
信力とはなにかという、
本當にわかるようになる。
信知する働きを信力とい
う。本當にわかるとは何
がわかるのかという、
が更に深くわかる。

右ページに続く

大見出しを入力します

小見出しを入力します

白抜き2行の
見出しです



絵解き (キャプション)



絵解き (キャプション)

白抜きの見出しです

この枠は2行
入力できます

この枠は2行
入力できます